

Tom Paulin——歴史と想像力

羽 矢 謙 一

Tom Paulin——歴史と想像力

羽 矢 謙 一

Tom Paulin は1949年1月25日、England 北部の West Yorkshire に在って、古くからの工業都市として知られている Leeds に生まれた。だが彼がそこで暮らしたのは精々小学校時代までであって、一家が Northern Ireland の首都の Belfast に移り住んだので、彼は Annadale Grammar School に学んだ。それは街の中央を南北に流れる River Ragan の右岸の川沿いの Annadale 地区に在る学校だった。大学は Yorkshire の University of Hull と、Oxford University に進んだ。現在は England 中部の Nottingham に住み、Nottingham University の lecturer として英文学を講じている。とは言っても、この間も、何度か Northern Ireland と England の間を、Irish Sea を船で渡って、往復したことであろう。

主な詩集は現在までに3冊出されている。皆 Faber and Faber から paperbacks で出されている。*A State of Justice* (『正義の国家』, 1977), *The Strange Museum* (『おかしい美術館』, 1980), *Liberty Tree* (『自由の木』, 1983) である。これら詩集の他に、大学院論文を大幅に修正し、拡大し、新材料を加えたという、Paulin の野心的な研究書、*Thomas Hardy: The Poetry of Perception* が1975年に Macmillan から出版された。

Paulin の半生の背景については、John Haffenden が10人の今日の詩人たちと対談して、それを編集した対談集、*Viewpoints* (『さまざまな視点』, Faber and Faber, 1981) に収められた Paulin 自身の発言に詳しい。

Paulin の母方の祖父は製氷冷蔵倉庫会社の経営者であった。1912年に Scotland の Glasgow から Belfast に移住して来た人である。彼は信仰の上では、カルバン主義 (Calvinism) を奉じる Puritan の一派で、長老派教会 (the Presbyterian Church) と呼ばれる宗派の信者、すなわち Presbyterian であった。だが政治の面では、彼はその妻と共に、連合主義 (Unionism) の支持者、すなわち Unionist であった。Unionism とは、1800年に締結され、翌年1月に発効した法案で、Britain と Ireland の「連合」(実際は「併合」とでも言うべきもの)を決めた連合法 (the Act of Union) に淵源を持っていて、今日もなお、Ireland が Britain から分離独立することに反対し、進んで Britain との連合を支持する考え方のことである。当然のことながら、Britain からの植民者たち (settlers) の子孫が多く、Northern Ireland に大きな権益を持つ Protestant が、この Unionism の支持基盤となった。

この祖父母の娘、つまり Paulin の母は恐らく Belfast で生まれた人である。北アイルランド生まれのスコットランド人 (Ulster Scot) というわけである。Paulin は、この母親の実家の人々が、

倦まずたゆまず努力する人間であり、彼らの勤労の倫理や、市民としての責任や、沢山の潔癖な罪の意識の塊まりに代表されるように、ビクトリア朝時代人的 (Victorian) であり、そしてまた、大層話好きの人々であったことを語っている。この中には勿論、Paulin 自身の母親も含まれていると思う。Paulin は更に、この人たちの中に「カルバン派の権威主義」(Calvinist authoritarianism) の伝統が完璧な形で生きていたことを述べ、それが自分の心を強く惹き付けていることを告白している。Paulin がここで「権威主義」と言っているのは、恐らく神中心の敬虔な、他律的な生活態度を指すのであり、幸福主義的、功利主義的態度とは相容れないものを意味していると思う。

その意味では、この Paulin の母親の持っている雰囲気は、彼女の夫、つまり Paulin の父親のそれとは違っている。Paulin に言わせると、学校長をしていた彼の父親は、「大変な自由主義の人間」であり、また、「多面に互る生活の幅を持つ魅力的な功利主義者」であった。「自由主義者」とは、教会や国家にとらわれないで、自由な個人として生きることを大事にする人という意味だろうか。そして「功利主義者」とは、個人の幸福の追求と、それを根幹にした社会の福祉ということを目標として生きる人のことを言うのだろうか。これらの言葉の中から浮かんで来る Paulin の父親の姿は、同じ Protestant であり、かつ、非国教会派 (Nonconformist) ではあるが、厳格な Puritan と違い、従って権威主義的でなく、あくまでも個人を主体とし、自由に物を考える人であり、進歩思想家であり、時には無神論に近いような言動もするというような人ではないだろうか。Paulin は、自分がこの父親と思想的には大いに違った所もあるが、それにも拘らず、この父親の哲学は自分にとって非常に興味深いものであったことを述べ、それに影響されたことを認めている。

この Paulin の両親は、共に Unionist の政治家に投票したという。だが Paulin はこの両親が、母方の祖父母とは違って、Unionist と同じ型の人間ではなかったことを暗に語っている。勿論そこには Paulin の、自分の両親に寄せる身慕いもあるかもしれない。しかし、彼が両親と祖父母との間に引こうとした一線の持つ意味はもっと大きい。殊に Paulin は母親の中に流れる長老派教会主義 (Presbyterianism) が大変「急進的」(radical) なものであり、「自由に物を考える」(free-thinking) ものであることを強調している。このことの意味は、これだけでは、はっきりしないが、多分、一方では国家の権威による個人の自由の束縛を排除する自由主義を意味し、もう一方では利権確保のために、便宜主義的に節操を持たないで生きる生き方を否定するような、理想主義を意味するものではなかったろうか。

今日 Ireland 北東部、Ulster 9 州のうちの、北部 6 州で形成している Northern Ireland の中で多数派を占める Protestant が、彼ら自身の権益を守るために Union Jack の旗を振っているくせに、それにも拘らずイギリス人は憎むという矛盾した態度に Paulin はあきたらないのである。そういう所で彼は自分の中に流れる母親の血を感じているに違いない。それは彼に言わせれば多分本来の Presbyterian の取るべき態度ではないのだ。

Paulin はこのことと他にもう一つ、Ulster Protestant の持っている閉鎖性を指摘している。

それは多分こういうことだと思う。つまり、Ulster Protestant の中には、一方で、政治的にも経済的にも自分たちより強大で、自分たちに干渉や圧迫を加えようとするイギリス人に対する憎しみがあるのであり、同時に、他方で、たとえ相手が同じアイルランド人であるとはいえ、Catholic の人々に対する相容れない気持ちがあるのだ。そして、そういう Protestant の持つ閉鎖性や排他性が、Northern Ireland を強権国家にしているに違いないのだ。Paulin は自分がこの閉鎖性の中にいた時、「閉所恐怖症」(claustrophobia) に陥る恐れを感じて、それから逃げ出したかったことを告白している。

There's a sense, particularly in Irish culture, of deliberate—in fact doctrinaire—disloyalty. I grew up in a culture that was officially Loyalist, but I came to see it was a rotten society: I left it not for political reason but simply because I wanted to get away from the claustrophobia of that society.

殊にアイルランドの文化の中には、理論で固められた、それこそ教条主義的な反イギリスの気分があります。ぼくは表向きは親イギリス派の文化の中で育ちましたが、そこが腐敗した社会であることが分かるようになりました。ぼくがそこから離れたのは政治的な理由からではなくて、単に、あそこの社会にいて閉所恐怖症に陥る恐れから逃げ出したかったのです。

自己の権益を守るために節操を曲げ、強権によって自由な思想や行為を弾圧するという国家は、宗教性を欠いている国家としか言えないのであり、Paulin はそういう国家としての Northern Ireland の墮落に愛想をつかしているのである。

Northern Ireland の Protestant は特に東部に多い。現在、そのうち Presbyterian は人口の4分の1.2を占め、もともと Ireland に進出した Anglican Church であった Church of Ireland の信徒、すなわち Anglican は人口の4分の1を占めていて、両者合わせると、Protestant の人口は Northern Ireland の人口の約3分の2を占めるのである。Church of Ireland は Catholic の人々だけではなく、Presbyterian の人々による反感も強かったため、1869年に非国教化されたのであった。Presbyterian も Anglican も共に17世紀初頭から数次にわたって、Britain から特に Ireland の北部に大量移住して来たのであった。その結果、やがて、彼らの人口はかつて1700年頃までは Ireland 全土の人口の70%も占めていた Catholic に対抗し得る人口数になった。そして、これら植民者たちによる土地収奪が17世紀を通じて迅速に進行し、Catholic は本当に貧しい小作人に落ちてしまった。今日なお、Ireland 全土では Catholic が多数派であるが、Northern Ireland の中では Catholic は人口の3分の1でしかない。

17世紀以来、1695年に始まる数度のカトリック刑罰法 (Coercion Acts) が施行され、Catholic の政治的経済的権利が次々と奪われて行くと、支配者の宗教としての Church of Ireland、つまり Anglicanism と被支配者の宗教としての Roman Catholicism の信仰の対立が定着したのだった。Catholic は、支配者の側によって「異教徒」として扱われたのである。この両者の間に、

Church of Scotland の流れを汲む Presbyterianism を奉じる人々がいた。彼らは Scotland からの移住者によって占められており、主に小生産者層を形成したのであった。そして彼ら小生産者層の理想主義が、Presbyterian をして Catholic との連帯を支持させ、彼らを反英運動に駆り立てたのであった。

そして1798年のアイルランド人連合 (United Irishmen) による反乱が彼らの連帯の頂点であった。しかし、反乱が鎮圧された直後1800年に連合法が成立し、Ireland 全土が Britain に強引に併合された。そのような状況の下で、1820年代に Belfast の Presbyterian の人々の間でカトリック解放 (Catholic Emancipation) の問題、つまり Catholic の諸権利が復活される見通しについて意見が分かれ、1829年に Presbyterian は硬軟両派に分裂してしまった。強硬派は Roman Catholic の拡大を阻止しようとする地主層と結び付き、Anglican と連携して、Catholic に反対することを明らかにした。こうして、主に小生産者層である Presbyterian は分解し、彼らの急進的理想主義は大勢としては終わってしまった。その後、大筋では、Catholicism の信仰と Ireland 全土の統一を求める運動とが結び付いて、これらが、Protestant と対立することになった。そして当の Protestant の内部では、Anglican と Presbyterian の距離が縮まったのである。

連合法の廃止を求め、Ireland 全土の統一と自治を叫んで、主として Catholic の人たちがアイルランド自治要求運動 (Irish Home Rule) を起こして行った。そして、1886年と1893年の2回にわたるアイルランド自治法案 (Irish Home Rule Bill) が出され、イギリスの心ある人たちもアイルランド自治の不可避性を認めて来たにも拘らず、2回共失敗に終わった。そして、1912年から1914年にかけて3回目の要求が起こされたのであった。1912年にイギリス議会上院に上呈された自治法案は翌1913年に下院では可決されたものの上院で否決され、1914年に修正案が出されて、やっと上下両院で可決されたのであった。ところが第1次大戦が勃発し、その発効が延期されたために、Ireland の民族主義者たちの気持ちは大層焦立たせられたのであった。それが1916年4月の Dublin で起こった「復活祭蜂起」(Easter Rising) の武力闘争を引き起こし、それは1週間で英軍によって鎮圧されたが、この事件は Ireland の自治どころではなくて、その完全独立運動をめざす気運を掻き立て、大戦終了後、1919年1月21日 Sinn Féin が南部の Ireland でアイルランド議会 (Dail Eireann) を設け、独立共和国を宣言した。即日これに反対する北との間に戦い (the War of Independence) が起こり、それは1921年7月11日の休戦まで続いた。アイルランド共和国軍 (the Irish Republican Army) がこの時に結成され、イギリス軍、親英派アイルランド警察機動隊 (the Royal Irish Constabulary)、そしてイギリスが送り込んだ悪名高い Black and Tans と呼ばれる、黒の帽子にカーキ色の制服を着けた、半軍隊、半警察の集団と戦ったのであった。

1921年12月6日に北部6州を切り離して、Ireland 南部をイギリス帝国 (British Empire) の中の自治領 (dominion) として認める条約が結ばれ、翌1922年にアイルランド自由国 (Irish Free State) が発足した。この後 Ireland は Protestant 専制の警察国家でイギリスの属領となった北部6州と南部26州の「自由国」に分割された。共にイギリスの認知を受けた南北の政府をめぐって各派間の抗争が始まり、不断の内戦状態となり、究極的には南北 Ireland の完全合体独立を求める

IRA と、北部6州を中々手放そうとしないイギリスの「戦争」となった。

第2次大戦後から今日まで、南部はアイルランド共和国 (the Republic of Ireland) として一応独立国となり、北部は連合王国 (United Kingdom) の一部として Britain との連合 (union) に踏み留まっていて、1921年の南北分離の図式は変わっていない。そしてあくまでも南北の統一を求める人々と Britain との連合を求める Unionist の対立が今なお続いているのである。

Paulin が彼の詩の中で常に強く意識に上せているのは Northern Ireland の「国家」と、Northern Ireland で今日現実に起こっている出来事と、そしてその歴史である。だが彼にとってそれらのものよりもっと大事であり、本当に大事であるものは国家や出来事や歴史から零れ落ちた所にある、Northern Ireland の人や風景なのである。

‘States’ (「国家」) と題する詩では乗客を乗せて夜の海を渡って行く船のことが歌われる。海は Irish Sea であり、黒い海の広がりの方こうに見える都市の灯は Belfast とその近くの都市の灯であろう。今は夜明け、船は間もなく Northern Ireland に近づこうとしている。語り手は、甲板に立って暗い海を眺めている一人の男に向かって語りかける。その男は軍の制服を着ている。彼は England に一時帰休し、再び Northern Ireland の「戦場」に向かう英軍の兵士だろう。彼の服から綿毛が出て、烈しい海上の風に吹き散らされている。それは大分くたびれていて、決して格好のいい物ではないのだ。そのくたびれた制服がそれを着ている男の哀れさを誘う。そしてそれはどうしても Northern Ireland の紛争のことを思い出させずにはおかない。

Your army jacket at the rail
Leaks its kapok into a wind
That slices gulls over a dark zero
Waste a cormorant skims through.
鵜が一羽掠め飛ぶだけの
暗いゼロの海原の上で
鷗の群れを薄切りにする風の中に
手摺りに掴まった君の軍隊服の切れ目から
綿毛が飛んで行く

人間は自然のままにおかれると自己保存の法則に従って「自然法」を行使して、万人の万人に対する戦い (*bellum omnium contra omnes*) という結果を生む。そこでこの無秩序状態を回避するために人間の理性は契約を結んで国家を作り、全権を国家にゆだねるのである。これが17世紀イギリスの哲学者 Thomas Hobbes の国家論である。それは功利主義の倫理に根ざす新興市民階級の理念と絶対主権の思想の妥協の産物であった。Hobbes に従えば、国家とは必要に迫られて成立した人間の協同体であった。善悪の判断の基準は国家にあるのであり、その国家は人民に秩序と規律と服従を強いるのである。Ireland の Unionist の政治哲学の原点はまさにこの Hobbes の思想

にあると言うことが出来る。17世紀イギリスの新興市民階級の未成熟が生み出した妥協的な政治理念が、遮二無二近代化を急ぐ Northern Ireland の Protestant によってそのまま継承されたのであった。

勿論 Hobbes は国家主権の絶対性の基礎はあくまでも人民の自己保存権においたのであった。けれども彼が巨大な君主の君臨する絶対主権の国家を巨大な怪獣レビヤタン (Leviathan) になぞらえた時、絶対主義国家の黒い影が落ちたのであった。人間の中の自然を悪と見る所から出発して成立する国家が個人の幸福を保証する筈はない。最大多数の最大幸福 (the greatest happiness of the greatest number) の理念はごく自然に個人から国家へと摩り替えられて行く。

そして Ulster Protestant の国家理念もそのようなものであった。国家に反対する者は国家が「正義」の名の下に断罪し、個人の利益や幸福もすべて国家のためには犠牲にされなければならないという絶対主義の国家観となって行った。それは近代化を急ぐ Ulster Protestant の焦りの結果だったのではなかったか。

‘States’ の詩の中で、Paulin にはいつしか自分たちの乗っている定期船が Ulster Protestant の国家を表わしているように思われて来る。荒れた夜の海は人間の中にある無秩序の自然のように見える。でも本当に人の中の自然とはそのように無秩序なものなのだろうか。だが Ulster Protestant の理念では自然は「暗いゼロの海原」に等しいのだ。そしてそのような自然から人々を守るために作られたものが国家なのだ。だが Paulin の描くその国家は、何とすべて金属的で、機械的で、非情な物であることか。

Any state, built on such a nature,
Is a metal convenience, its paint
Cheapened by the price of lives
Spent in a public service.

国家はすべてこのような自然の上に建てられ
それは一つの金属張りの文明の利器である その飾り立ては
公共への奉仕に費やされる数々の命の代償によって
勞せずして手に入るのだ

性急に近代化を急ぐ国家が個人の幸せを守るという原理と根本的に相容れる筈がないのだ。Paulin の中に流れている、自由思想、非国教会派的な反体制の性向、個人の側に重点をおく功利主義、そういったものは、どう見ても、Ulster の国家とは合う見込みはないのだ。

The men who peer out for dawning
Gantries below a basalt beak,
Think their vigils will make something

Clearer, ...

玄武岩の出つ鼻の下の

明け行く信号橋に目を凝らして眺める人々は

それらの寝ずの番の灯りの辺りは

もっと明るいのだらうと思うのだ

多分黒く立ちはだかるように見える玄武岩の山裾に、夜の海に向かい合って、身を寄せ合っているような都市の灯りが見える。その明るさは何か文明の灯を思わせるようなものかもしれない。だが本当に文明の灯なのだろうか。原詩は「もっと物がよく見える」(will make something Clearer)となっている。けれども都市に住む窮民を切り捨て、辺境は荒廃にまかせた上での都市の文明なんて何だと言うのか。

... as the cities close

With each other, their security

Threatened but bodied in steel

Polities that clock us safely

Over this dark; freighting us.

やがて都市が犇めき合うのが見えて来る

彼らの安全は脅威にさらされてはいるが

鋼鉄の国家組織という体を与えられていて

その体が暗闇の海を渡って

ぼくらを安全に時間通りに運んでくれる——いやぼくらを運送するのだ

国家は荒海を渡って民衆を運んでくれる頼もしい定期船のようなものだ。でも、「安全に時間通りに」運ぶことにどれ程大きな意味があるというのか。しかもこの定期船は実は客船ではなくて貨物船なのだ。きらびやかな装飾が施され、鋼鉄が張られて固められてはいるが、装飾はまどわしであり、鋼鉄は人々を締め付ける物に過ぎない。固い規律とか法律とか、要するに個人の自由を奪い、個人の生活を統制する物に他ならない。そしてこの船に乗っている人間は、実は乗せられているのであり、彼ら一人一人が積荷として「運送」されているのだ。民衆は人間ではなくて家畜なのだ。どこかに送られて行く家畜なのだ。‘freighting’という言葉の中から‘fating’という言葉の響きが重なり合って聞こえて来る。国家が個人を守ると見せかけて、実は国家のためという至上命令の下に、一人一人の人間が暗い共同の運命に縛り付けられているのだ。それが Paulin の見た Northern Ireland の「国家」の姿なのだ。

Paulin に言わせると、歴史の中には一つの力が働くのであって、それは復讐という形で歴史の中に現われるのである。それは人間の中にある自然の情念であり、本来は生命的なもの、豊かなもの

のを求める心であるのだが、虐げられ、歪められると暗い復讐の情念となるのだ。時には国家や権力の体制に逆らって燃え上がる個人の怨念であることもある。Paulin にとって歴史とは散々いためつけられた Ireland の下層民の民衆の、彼らを切り捨てて憚らず、ひたすら恵まれた者たちだけの利益を求め、守り、反抗する者には強権を加えながら、近代化を急ぐ Protestant の国家に対する怨念の復讐なのだ。‘Under the Eyes’（「目の前で」）の詩では冒頭からそういう民衆の怨念の影とも言えるような一人の男が現われて、復讐の思いを吐くのである。それはまさに歴史の復讐なのである。

怨念の影とも言えるこの男は、都市、多分 Belfast であろうが、その中でも坂の斜面を切り拓いて造成した土地にうんざりする程限りなく並べ建てられた、貧しい人々の住む住宅の一画に現われて立ち、呟いているに違いない。

Its retributions work like clockwork
 Along murdering miles of terrace houses
 Where someone is saying, ‘I am angry,
 I am frightened, I am justified.
 Every favour, I must repay with interest,
 Any slight against myself, the least slip,
 Must be balanced out by an exact revenge.’

その報復は殺人的に何マイルも繋がったテラスハウスの辺りで
 時計仕掛のように動く

その辺りの所で誰か呟いている者がある

「おれは怒りと恐怖で一杯だ おれには正当な理由がある
 良くして貰ったことにはおれは必ずおまけを付けて返す
 でも軽んじられたり無視されたりしたら
 正確な仕返しで帳尻を合わせにやらぬ」

ヨーロッパの伝統では、正義の女神は右手に剣を持ち、左手に黄金の秤を掲げて立ち、目には目隠しがされている。邪悪を破り、公正を示す姿である。秤は勿論事の善悪を「正確に」測ることを意味している。だが今日、己れに逆らう民衆を裁く Northern Ireland の Protestant の「国家」は正義の女神だろうか。

The city is built on mud and wrath.
 Its weather is predicted; its streetlamps
 Light up in the glowering, crowded evenings.
 Time-switches, ripped from them, are clamped

To sticks of sweet, sweating explosive.
 All the machinery of a state
 Is a set of scales that squeezes out blood.

この都市は泥と怒りの上に築かれている
 その天候は初めから分かっている
 事件で一杯の燃え上がる暮れ方に街燈が燈る
 街燈から引き剥がされた時限スイッチが
 よく働く凄惨な爆薬の信管に締め付けられる
 一つの国家の機構がすべて
 血を絞り出す一組の秤だ

Protestant の「国家」は法と秩序を建前とする国家だ。Paulin の言う「正義の国家」(a State of Justice) だ。だがその実体は強権国家である。天も人も怖れることを知らない、非宗教的な、横暴の国家だ。正義とは程遠い不正義の国家であり、慈悲とは程遠い残酷の国家だ。この国の象徴的存在とも言える都市、特に Belfast は、表面をいかに美々しく粧っていても、Ireland の貧しい泥土と、抑圧された民衆の怒りの上に築かれているのだ。Ireland の悲しい歴史の上に築かれているのだ。だから、そこの天候はいつも狂っていて、それは初めから分かっているのだ。そこではいつも血と狂気の雨が降る。この「正義の国家」は正義の女神よろしく目隠しをすることによって公正を粧っているように見えるが、その実は多分目隠しの下からぎらぎらと光る、自己保存の欲望と警戒の目を覗かせているに違いない。左手に持った秤は金色に輝くどころか、血を滴らせている。右手の剣は言うまでもなく、狂気の権力が持つ殺戮の剣だ。過去の歴史の中に起こった歪みをそのまま今日にまで持ち越し、民衆の圧制と民衆の反抗に対する報復を繰り返す強権の国家が今日の Ireland の狂った天候を今なお持続させているのである。

そして Ireland のこの狂った天候はすでに遠い過去から続いていたのであって、Paulin の先輩詩人である William Butler Yeats も彼の生涯を通じてこの Ireland の狂気を経験したのであった。

Now Ireland has her madness and her weather still,

——Wyndham Hugh Auden, 'In Memory of W. B. Yeats' II.

今もアイルランドは狂気を失わず 天候も一向に変わりません

(「W. B. イエイツを悼んで」その2)

Protestant の「国家」の「正義」は実に正義の女神のもじりである。彼らの記憶は正確であり、彼らの「法」に歯向かう者は決して忘れず、追求の手を弛めない。仕返しを受けたら必ず仕返しをする。彼らの体制も完璧であり、すべては確固たるものとなっている。だがそれらは本当に確固た

るものであるのだろうか。彼らは武力によって齒向かう者たちを押さえ込み、何事もないかのように振舞うのだけれど、絶えずどこかで不安は続いている。

Memory is just, too. A complete system
 Nothing can surprise. The dead are recalled
 From schoolroom afternoons, the hill quarries
 Echoing blasts over the secured city
 記憶もまた正確である 完全な体制は
 何者もこれを驚かすことは出来ぬ 死者たちは
 教室の午後の日々から呼び戻され 山の石切場が
 爆破の音を響かせてもその下の都市は防備で固められている

一見何事も起こらないかのように見える。だが防備で固められた体制の「隙間」の所では、判事 (a Judge) が殺されるというような恐ろしいことが現実になっているのだ。「審く人」が「審かれる」のだ。「正義の国家」の「法」の番人、実は報復の元兇が「審かれ」報復されるのだ。

Or, in a private house, a Judge
 Shot in his hallway before his daughter
 By a boy who shut his eyes as his hand tightened.

A rain of turds; a pair of eyes; the sky and tears.
 だが個人の家では一人の判事が
 娘のしている前で廊下で撃たれたのだ
 一人の少年が目をつぶって引金を引いたのだ

糞尿の雨 一對の目 涙を溜めた空

勿論 Paulin が terrorism を肯定しているとは考えられない。彼は歴史の中に表わされる、物事の成り行きの枠組、つまり報復の連鎖の中にそれをおいて眺めているに過ぎない。だが、そうは言っても Paulin の眺めた情景は実に凄惨なものである。雨と飛び散る人間の血と肉。この世の醜悪そのものだ。「目の前で」現実に行き起こる恐怖を見つめる一對の目は父親を殺された少女の目だけではあるまい。それは正義の女神の目だろうか。いや彼女は目隠しをしている筈だ。とすれば、それは慈愛の神の目なのか。空は悲しみの涙を一杯溜めている。詩人はその涙が慈愛の神の慈悲の雨となって地上に注がれ、血と肉の汚れを洗い流してくれることを願っているのではないか。

‘Thinking of Iceland’ (「アイスランドのことを思いながら」) は何かほっとするような、懐し

い気持ちを与えてくれる詩である。Paulin は今、多分 Yorkshire の Hull にいて、そこからの船旅だと4日間もの日数がかかる Iceland への休日旅行のことを思いながら、実際には Ireland の寒村の風景を語っていくのだ。Paulin は自分がこれから行こうと思っている Iceland が、今では Ireland から失われつつあるものをまだ残し持っているのだと思う。つまり、彼が昔知っていた Ireland の平和でのどかな寒村の風景と、今でも同じように平和でのどかと思われる Iceland の風景がダブルなのだ。Paulin は今、懐しい昔の Ireland の面影を求めて、Iceland に出かけようと思うのである。他には何の意味も理由もないのだ。そこは恐らく、かなり遠い昔からあんまり「動いて」いない世界に違いない。Paulin は Ireland の紛争の重圧を一方に感じながら、そういう、歴史や政治の外にある世界に、限らない安堵と、それに対するいくつしみの気持ちを抱いているに違いない。1972年9月から1976年6月まで続いた鱈戦争(cod war)では Richard Crossman のような進歩派の政治家は大いに悩んだことであろうが、今 Paulin が「思っている」Iceland は、そういう政治問題とは関りない Iceland である。そして、Iceland から送られて来る友人たちからの手紙も皆、他ならぬ Ireland の田舎の地名を呼び起こさせるものばかりなのだ。

Still, reading the letters
 they fired back to England
 (one, unfortunately, to Crossman)
 brings back a winter monochrome
 of coast and small townships
 that are much nearer home:
 Doochery, the Rosses, Bloody Foreland.
 その上イングランドに
 投げ返されて来る手紙を読むと
 (一通は不運にもクロスマン宛てだったが)
 海岸や小さな町区の
 単色の冬景色を呼び起こされるが
 それらはどこより故郷の景色に近いのだ
 ドゥーシェリーやザ・ロッシズやブルーディ・フォアランドに

Paulin の思いは Iceland にではなくて、「故郷」の Donegal の風景や人間の姿に注がれて行く。

An empty road over hills
 dips under some wind-bent,
 scrub trees, there's a bar

painted pink, some houses,
 a petrol pump by a shop;
 it's permanently out-of-season
 here where some people live for some reason.

幾つもの丘を越えて続く人気のない道路が
 風で捲んでいじけた林の下で下り坂になると
 ピンク色に塗った酒場や何軒かの家があり
 とある店の横にはガソリンポンプがおいてある
 ここは永遠に季節外れの場所なのだが
 どういうわけか住んでいる人がいる

Paulin がこの「季節外れの」場所に深い愛着を持っていることは明らかだが、「季節外れ」とはどういうことだろう。それは時代の流れと歩調が合わないことを意味するのだと思う。Paulin にとってはこの場所こそ「心の家郷」なのだろうと思う。

A cluster too small for a village,
 fields waste with grey rocks
 that lichens coat——hard skin
 spread like frozen cultures,
 green, corroded tufts that make dyes
 for tweed——shuttles clack
 in draughty cottages based in this sour outback.

村と言うには小さ過ぎる集落
 畑は荒れて 地衣に被われた灰色の岩ばかり——
 樹木の固い表皮が凍結された培養菌のようだ
 ツイードの染料を作る木の
 緑の房状の葉は腐食している——
 この瘠せた内陸部に建つ透間風だらけの田舎家のあちこちで
 籽がカタカタと鳴る

だがこの貧しく、凍り付き、透間風の吹く酷しい風土に住む人々は得難いものを持って生きている。それは都市の、合理的で実利的な生き方から見れば「変わっている」としか言いようのない生き方だ。そこでは一見何の役にも立たないようなことが行われている。例えば町や通りの名、駅や停留所の名など、皆英語とケルト語の両方で書いてあるのだ。酷しく寒い風土は其中でなされる人間の営みを常に空しくしてしまうかのように見える。だが人々の方でも、それにあらがわない。

人々もそういう風土の中で悠々と生きているという感じだ。まるで何事も「冗談のように」生きているのだ。Paulin は明らかにそういう Ireland の片田舎での人々の生き方に惹かれている。

On the signposts every place
has two names; people live
in a cold climate, a landscape
whose silence denies efforts
no one feels much like making:
when someone is building
it looks like a joke, as though they're having us on.
道標にはどこの場所でも
二つの名前が書いてある
人々は寒冷の風土の中に生きているが
その風景は何にも言わず 人々の努力を否定する
だが人々の方でも別に大した努力をしているとも思っていない
誰かが何かを作るとする
とその時それは冗談のように見えるのだ まるでこちらがかつがれているみたいに

現実の生活も当然とても酷しい筈なのだけれど、ある人々は陽気に、ある人々はのんびりと、そしてある人々は逞しく生きている。

In these black parishes that seem
dissolved in a grey dream
some men are busy mixing concrete, digging septic.
この荒涼とした教区の町々は
一つの灰色の夢となって融け込んでいるように見える
たとえせわしくコンクリートを捏ね、浄水槽を掘る人々がいようと

灰色の夢の世界と化した町の生活は、都市の生活のような落ち着きのなさを持たない。それは現実離れがしているように見えても、実は大変現実にも密着していて、それ故に人々に安堵感を与えるのである。

だがはっとする場面もある。それは Ireland では歴史的にも珍しいことではないが、追い立ての場面である。貧しい家族が地代や税金を払えなくて家を明け渡す情景は深刻であるが、それにも拘らず、何となくゆとりを感じさせられるものがある。

In the dark panelled bar
 through the shop, there's a faded
 print of an eviction:
 one constable crouches
 on the thatch, the family stands
 at the door, pale, while bands
 of constabulary guard the whiskered bailiff.

店の奥に入った
 暗い板張りのバーの中に
 追い立ての色褪せた刷り物が貼ってある
 一人の巡査が
 草屋根の上にしゃがんでいる
 家族は戸口の所に青い顔して立っている
 警官の一隊が頬髭を生やした執行吏を守っている

北海 (the North Sea) と大西洋に挟まれたこの Ireland の片田舎の町は往古には北海文化圏の一環として Iceland とも繋がり、脈わいを持った所かもしれない。だがこの町も今では Iceland と同じように「伝説の国」の町となって、海岸にはドックはあっても、そこに入って来る船はない。人々は今ではこの「伝説の国」、夢の国の中で自足して生きているのである。

In the top corner, clumsily,
 the face of a young woman
 glimmers: *The Irish patriot*,
Miss Maud Gonne. Sour smell of porter,
 clutter of hens in the yard:
 no docking in sagaland——
 the wish got as far as this coast, then worked inland.

一番奥の隅に寒さでかじかむように
 一人の若い女性の顔がおぼろに光る そこには
 「アイルランドの愛国者ミス・モード・ゴン」と書いてある
 すえたような黒ビールの匂い
 囲いの中で牝鶏たちが騒ぐ だが
 伝説の国にはドックに入る船はない——
 願望が届いたのはこの海岸までで 後は内陸に進んだのだ

ケルト民族 (the Celts) の Ireland 侵入から始まって Maud Gonne に至るまでの Ireland の「歴史」がここでは全く否定されている。Paulin は歴史から人間的なもの、生命的なものを救い出そうとする詩人だ。この詩の中で「伝説の国」に愛情を寄せる Paulin の中にも、歴史と対決し、歴史を拒否する強い姿勢がはっきりと打ち出されているのである。ただし、ここで歴史を拒否すると言うのは決して歴史から目をそむけることを意味しないのであって、Paulin は常に歴史からの重圧を一身に感じ取っている詩人である。

‘Thinking of Iceland’ の詩では最後の一節になって Paulin の頭の中に描かれる情景が急に Ireland から Iceland に移る。Iceland 北部の、海岸から南部に入った所にある町 Holar が現われる。Holar は中世初期、教育の中心地であった所であり、また多分 Catholic の主教管区 (See of bishopric) のあった所である。16世紀中葉には Iceland に Lutheranism が強引に持ち込まれたりしたため、恐らく激しい宗教戦争もあったのではないか。

Paulin は多分 Iceland に行っている友人の一人からの手紙で、この Holar の町のことを聞かされたのだろう。彼はのどかな Iceland の中にもすでに今日の状況の下に曝されている部分が存在していることを感じ取ったに違いない。教会の中で平気で煙草を吸おうとマッチを擦る者がいる。そこの教会の祭壇の後の飾りの彫刻の写真を撮ろうとする不心得な者がいる。しかもその彫刻には平気な顔で囚人たちを殺戮する異様な人間たちの姿が彫られている。その男はその彫られた絵の意味するものには無関心なのだ。また Holar の町で、Hitler の第1後継者であり、ナチの情報宣伝相であった Goering の弟と多分ホテルでの朝食の時に挨拶を交わしたことを得々として手紙に書いて来た者もいる。恐らくその男は Goering が何者だったかも深く考えようとせず、単に「有名人」志向によって動く、単純な旅行者であるに違いない。これら単純で軽薄な観光旅行者たちが訪れるような仕方では Iceland を訪れることを Paulin は拒否するのである。Iceland の寒村にしても Holar のような町にしても、それらが意味するものも彼ら旅行者たちには全く通じないのである。

And yet, at Holar, striking matches
in church, trying to snap
a carved altar piece: strange figures
absent-mindedly slaughtering
prisoners; or ‘exchanging politeness’
with Goering’s brother at breakfast,
was this coming-full-circle not the question they asked?

だがホラーでは

教会の中で煙草に火を付ける

祭壇の後の彫刻の写真を撮ろうとする

しかもそこには事もなげに

囚人たちを殺戮する異様な人間たちの姿が描かれているというのに——

また朝食の時にゲーリングの弟と「交歓」する手合もいる
この一巡りで皆の疑問に答えたことになるんじゃないかしら

Paulin は自分が Iceland に出かけるのも平和な昔の Ireland に出会うためなのだということ
を、何のために Iceland に行くのかという友人たちの疑問への答えとしているのである。

‘From’ (「遠く離れて」) も歴史から零れ落ちた土地, 「季節外れの」土地の風景を歌った詩である。
Paulin はかつて自分が住んだことのある Northern Ireland の海辺の寒村のことを懐しんで
思い出している。この詩の中で彼が呼びかけている人は多分、その当時彼の世話をしてくれた女性
か、あるいはもしかすると、かつての恋人で、今は別れているか、あるいは死んでいるかする人
であるかもしれない。

You've made a table you say, and are happy.

It's easy to understand where you are.

I can see you in a room we both know,

Cutting fresh wood, looking up now and then

To a window autumn light comes through.

There is a green glass float on the sill

And two stone jars we found washed by storms

On the strand. . . .

食事の仕度が出来ましたわと君は言うて にこにこしているに違いない

今君がどこにいるのかぼくにはすぐ分かる

ぼくら二人が共に知っている部屋に君がいるのがぼくには見える

伐り出したばかりの薪を割りながら

時々顔を上げて 秋の日が射し込む窓を見ているのだ

窓敷居に緑のガラスのような海が浮かんでいて

そこには浜でぼくらが拾った二つの石の壺がおいてある

嵐で飛ばされた物に違いない…

この詩の中にあるものも全体は単色で穏やかな風景ながら、更にそこには優しい光と静寂が全体
を被っていて、すべてが透明であり、緑色の海や青色の夕闇が黒白の淡い影の中に融け込んでい
る。

... In the blueness outside, frost

And a light that, touching, makes what you see.

In that still light and silence the long hills

That ring the bay are brittle, fixed in glaze.

戸外の青い空の中に霜が下り

一筋の光が射して それが物に触れてその物を照らし出す

その静かな光と静寂の中で

入江を取り巻く長い山なみが今にも毀れそう だがガラスの面の中で固定されている

静かな光が射し、静寂に包まれ、緑色に光る山なみと入江のこの風景は Paulin にとってこの世ならぬ世界であり、それは天国と言ってもいいような世界とされているのではないか。そこは、今は誰も住んでいる人はいない、いわば見捨てられた場所であるが、荒廃した場所と言うよりは、人々が去って行った後に本来の美しい Northern Ireland の自然が戻って来たような気持ちを抱かせるのだ。Ireland の自然はこんなにも美しい。そして、かつてそこに住んでいた人々も、酷しさの中にあっても、本当に人間らしい、豊かな気持ちと誠実さを持って生きたことがあったことをこの風景は示唆しているのである。

The island below you is a lost place

That no one can cross to in the neap,

The winter season. The tides stack,

But they never pull back; the graveyard

And ruined chapel are not to be reached now.

A priest lived there in the house when processions

Used to cross the sands slowly, in black.

Rotting boards nailed to its windows, that hermitage

Is obsolete. The light stays at that end

Of the island, catches that small, broken settlement

Where thin stones, laid flat on a humped ground,

Are carved with turnip skulls and crude bones.

A soft grass covers them and light falls.

君の目の下に見える島は失われた場所であり

冬の季節に小潮の時に渡って行く人もいない

潮の流れは静止はしても決して引いてしまうわけではない

つまり今頃だと墓場と教会の廃墟まで行き着くことは出来ない筈だ

坊さんが一人いる館があったが

あの頃よく砂浜を黒い喪服の行列がゆっくり渡って行ったものだけ

今はもうあの修道院も窓に腐れ板を打ち付けられて

使われていやしまい

あの島のあの一端に光が溜まり
 あの小さな 潰れた開拓地に当たっていることだろう
 そこでは瘤のように盛り上がった地面に平らにおかれた薄い墓石が
 粉々に砕かれて蕪の頭蓋や雨曝しの骨と混ざっている
 だが柔らかな草がそれらを被い、光が落ちている

下に見える島は余りにも貧しくて、今はもう維持して行くことの出来なくなった開拓地なのだろう。そしてそこは、その上に、もしかすると Northern Ireland の紛争の余波を受けて戦場になった場所でもあるのだろうか。あるいはそういうことではなくて、誰も面倒を見る人がいなくなったために、荒れ果て、無縁仏が無造作に葬られている地面に、死んだ犬か何かの骨や頭蓋骨を思わせるような大きな蕪の根っ子が入り混って転がったままに放置されているという情況なのだろうか。いずれにしてもここは見捨てられた「開拓地」である。けれどもここには夕日が射していて、それが光の溜まりのように見え、柔らかい草が砕かれた墓石のかげらや蕪の根っ子や地面に曝されたまま転がっている何かの骨を被っていて、そしてそこにも光が当たっているのだ。そういう光や草が何か安らぎを与える慈愛のように見える。

‘Before History’ (「歴史が起こる前に」) の詩では、Paulin は歴史の重圧の外に一寸でも出ていくことの出来る瞬間の中に安らぎを見出している。人は常に何らかの意味で歴史の中に生かされているのだけれど、Paulin は Belfast のような都市の中にいる時、恐らく普通の人より何倍もそのことを感じるに違いない。

Mornings when I wake too early.
 There is a dead light in the room.
 Rain is falling through the darkness
 And the yellow lamps of the city
 Are flared smudges on the wet roads.
 Everyone is sleeping. I envy them.
 I lie in a curtained room.
 The city is nowhere then.
 Somewhere, in a dank *mitteleuropa*,
 I have gone to ground in a hidden street.
 朝はいつも早く目が覚める
 部屋には重苦しい灯りが一つ点いている
 暗闇の向こうに雨が降り
 都市の黄色い街の明かりが
 濡れた道路に染みのように光る

人は皆眠っている　その人たちが羨ましい
 ぼくはカーテンを締め切った部屋に寝ているのだ
 都市は今どこにもない
 どこか湿った中央ヨーロッパの中にいて
 ぼくは隠れた通りに潜んでいるのだ

Paulin はこの詩の中で架空の人物の架空の出来事を書いているのかもしれない。しかし紛争の渦中にある Belfast の中にいる時の、Paulin 自身の複雑で油断のならない気持ちは真実だと思う。

この詩の語り手は都市のどこか人目に付かぬ通りにあるホテルの一室にいて、まだ明けやらぬ朝方に早々と目を覚ましていて、もう眠れないでいる。するといつしか彼は自分が中央ヨーロッパにいたような気持ちになる。中央ヨーロッパとはロシアの西からフランスの東にわたる地域のことだ。Graham Greene の小説の世界の中に現われそうな舞台である。そこは常に国境線が変わり、国際的スパイ、二重スパイが暗躍する世界だ。そこは誰が敵か誰が味方かわからず、いつ誰かに密告されるかもわからない世界だ。ありもしないこと、やりもしないことで、「敵」に仕立て上げられ処刑されるかもしれないのだ。だが今この男は明け方近くになって目を覚まし、やっと心の平静を取り戻す。だがそれも夜明けまでの僅かの間であるに違いない。

This is the long lulled pause
 Before history happens,
 When the spirit hungers for form,
 Knowing that love is as distant
 As the guarded capital, knowing
 That the tyranny of memories
 And factual establishments
 Has stretched to its breaking.

これは歴史が起こる前に
 やっと寝かしつけた小休止だ
 今この時愛は守りを固められた首都のように
 遠いことを思い
 記憶や積み重ねられた事実の横暴が
 今にも切れそうな糸のように
 伸び切っていることを思いながら
 精神は形を憧れ求めるのだ

今や Belfast は恐怖の都市である。「国家」に齒向かう者は容赦なく絞首刑に処せられ、それに対して、抵抗者たちの側からの報復の *terroism* が起こる。Paulin の精神は次々と起こり、そしてすぐに次々と過去のものとなって行く、毒々しい現実の出来事の集積に取り巻かれ、圧倒されそうなのである。Belfast はかつて彼が愛した都市ではもはやなくなっているのだ。そこに見られるものは敵意と敵意がぶつかり合う地獄絵であり、従らに *sensational* であるけれども何の意味もない、まさに忌わしい白日夢の連続なのである。

1922年に W. B. Yeats はバリリー塔 (Thoor Ballylee) にいて、そのすぐそばまで内戦の生々しい現実が迫って来たのを目の当たりにし、同年中に同じ場所で 'Meditation in Time of Civil War' (「内戦時代を生きる者の冥想」) の詩の大部分を書いたのであった。この詩の中に Paulin の思いと全く重なり合う Yeats の気持ちが吐露されている。

We had fed the heart on fantasies,
The heart's grown brutal from the fare;
More substance in our enmities
Than in our love; O honey-bees,
Come build in the empty house of the stare.—VI.

ぼくらが白日夢で心を養って来たために
心はその御馳走で野獣のようになってしまった
つまりぼくらの愛よりもぼくらの敵意の中に
実体があると思うようになったのだ ああ蜜蜂よ
掠鳥のいないこの館に巣をかけに来ておくれ

Yeats もまた忌わしい現実の混沌の中に自分の精神が溺れ込むことを拒否したのであった。そして彼の精神は混沌の現実によって季節さえも狂わされ、いつもならその季節になると館に巣をかけるに来てくれる小鳥も姿を見せないことを嘆き、秩序の回復を求めたのであった。

そして Paulin の言う「形」である。「形」とは何か。それは崩れ落ちるだけの混沌とした現実の出来事に対して静かに自身を支える精神の秩序のようなものを意味しているに違いないのである。それは一つの優美な形を持ち、それでいて強制されず、自由で自然であるものを、狂った現実の中におかれた詩人の精神が求める何か無茶苦茶ではなくて、きちんとしたものを表わしている。

先にあげた対談集 *Viewpoints* の中の Paulin の発言によると、'Line on the Grass' (「草地上の国境線」) の詩の実際の場所は、共に同じ Ulster の中だが、Northern Ireland に属する Co. Tyrone の Strabane の町と Republic に属する Co. Donegal の Lifford の町との間の国境線を横切る道路である。ここは Mourne River と Finn River がこの二つの町の間で合流して Foyle River となっている。また Donegal は IRA の根拠地と言われている。ゲリラが Lifford の町を根城にして Strabane の町の方に入出入りするのではあろうか。

Shadow in the mind,
 this is its territory :
 a sweep of broken ground
 between two guarded towns.

A tank engine rusting
 in the long grass, a man
 with a fly rod wading
 in the grey river
 心に落ちる影
 ここはその影の領域だ
 守りを固めた二つの町の間の
 起伏の多い一帯の土地

丈高い草の中で
 戦車のエンジンが錆びついていて
 釣竿を持った男が一人
 灰色の川を渡って行く

国境線の近くの風景と言えば、もう決まり切ったように思い浮かんで来る風景があって、それは夜の明け方の、殆ど人気もなく、動きもない静かな風景なのである。だが Paulin に言わせれば、実際はそういうものとは大いに違った風景なのである。国境線は確かにそこに存在する筈であり、確かに無気味なものを秘めてはいるが、むしろ日の光の中では、国境線などどこにもないのである。国境線という目に見えない物が自然の成り行きを妨げているのであって、白日の下の実実は国境線など全然認めないのである。

This looks so fixed, it could
 be anytime ; but, scanned
 in the daylight, the fields
 of crops, their hawthorn hedges,

seem too visible. The men
 riding black bikes stiffly
 along the road are passing
 a burnt-out customs post

on an asphalt apron.

They are observed passing,

passing, in a dull light:

civilians at four o'clock.

この風景はこんな風に固定していて

いつだって変わらないように見える

だが日の光の中でよく見ると

作物の畑もサンザシの生垣も

いやでも目に入って来るような感じだ

体を固くして街道を行く黒バイクの男たちが

アスファルトの前庭に立つ

税関の標柱の

焼け残りの前を通って行く

ほら彼らが通って行く

鈍い光の中を通って行く――

午後四時の市民たちが

あっけらかんとした寛らかさで国境線を踏み越えて道路を行く普通の市民たちの姿を Paulin は眺めている。それが異様な光景に見えたとすれば、それは眺める人が国境線存在をそこに意識するからであり、その人はもっと薄暗い、静まり返った風景を先入観として期待しているからである。だが、むしろ Paulin の眺める風景の方が自然なのではないか。国境線などは本当はどこにも存在しないのだ。税関の前庭の標柱の焼け残りを除けば、ここには何も変わった風景はない。こういう風景をあらためて歌う Paulin の中には Ireland が一つであることを願う気持ちが秘められていることは確かだと思う。

‘Going in the Rain’ (「雨の日の旅」) と題する詩では Ireland のどこかの寂しい海岸に雨に濡れて立つ英国々教会の古い牧師館の風景が歌われている。

An Adam house among tall trees

Whose glaucous shadows make the lawn

A still pool; bracken on the screens

Wedged above a lichened bawn;

A rectory on a broken coast ...

高い木立に囲まれたアダム様式の家

その灰緑色の影は芝生を静かな池のように見せていて
 地衣の被う家畜飼育場に割り込んでいるガレ場の上には
 羊歯の茂みがある あれは
 でこぼこの海岸に立つ牧師館だ…

その牧師館はアダム様式の建物だ。Adam brothers は、Edinburgh で死んだ建築家 William Adam (1689—1748) の4人の子供たちであり、皆18世紀の建築家や家具設計家となったのであった。中でも長男の Robert Adam (1728—1792) が一番有名であって、彼は Scotland で育ち、後に London に定住したが、彼の建築内部装飾は心と曲線を特色とし、画家でもあった彼はパステル風の淡い色彩を用いた。

アダム様式の牧師館の建物はいかにも18世紀の England の貴族の Ireland 支配の名残りを思わせる。この時代にはいわゆる country house と呼ばれる、貴族たちの大きな屋敷とその周りの広大な領地が沢山出現したのであった。この時期に、本来 Catholicism であった Ireland に英国々教会も数多く建てられたに違いない。16世紀から始まった England による国家的規模の Ireland 支配が18世紀にますます進行して行き、England や Scotland からの植民者たちがどんどん入り込んだのであった。

今この牧師館は廃墟となって、あまり流行らない観光用の建物となっているのだろうか。それは海岸でも多分比較的に高い場所に立っていて海岸を見下ろしているのであろうが、その高い場所の下は羊歯の茂ったガレ場の斜面になっていて、その更に下の地衣が一杯生えた家畜飼育場に突き出しているのである。実に佻しく、そして貧しい風景である。恐らくこういう土地は何度も植民者が入り込み、開拓が試みられながら、何度も捨てられて来たのではないだろうか。

Our journey notices these things
 Which aid the sense of being lost
 In a scoured countryside that clings
 To idols someone else imagined.

ぼくらの旅はこれらの物が
 誰か他人が想像した偶像に
 取り縋っている洗い濡れた田舎の
 どうしようもなさの感を助長していることに気付くのだ

Ireland の田舎は余りにも貧しく、どんなに開拓されても、開けはするがやがて人も住まず、打ち捨てられてしまうといった感じである。築いても築いても崩れて行くのだ。ジョージ朝時代 (the Georgian era) と呼ばれ、George I から George IV の在位に至るまでの期間、つまり18世紀から19世紀前半にかけての時代は British Empire の急角度の上昇繁栄の時代であり、それが

ビクトリア朝時代 (the Victorian age) という最盛期に引き継がれて行ったのだったが、殊に18世紀中は George I から George III までの在位期間、1714年から1820年までの3代にわたっている。この世俗的高揚の時代に反時代的アダム様式の影響を受けた建築家たちが Britain から Ireland に渡って行ったのであった。彼らは17世紀から18世紀にかけてイギリスで盛んだった理神論 (Deism) の信奉者であって、人間が持って生まれた自然のままの理性に根拠をおいて物事を考える人たちであり、神の支配は人間の理性に叶うものであることを信じ、つまり、神は自分が創造した万物の法則を決して破らないということを信じ、ひたすら神を礼拝し、神の前に敬虔であり、美德を守ろうとする人たちであった。彼らは自分たちの本国の文化よりもっと良い文化、もっと理性に叶った文化を Ireland にもたらそうという情熱を抱いてそこに渡って行ったのであった。

だがこの文化人たちとは別な面で Britain からの支配と収奪があった。そして英国々教会の役割はその支配と収奪の先兵となることだったのは明らかだ。勿論国教会の牧師の中にも立派な人もいたであろうが、それは別の話だ。教区 (parish) と呼ばれる組織は、その中心に教会がおかれていながら、実際は宗教的意味よりもむしろ行政の最小単位としての意味を持つものである。18世紀末期には Ireland で大きな反乱が起こり、それが鎮圧され、その結果として連合法が1800年に成立し、この連合法によって、Ireland 全体では多数者であった Catholic の人々までが教区税である十分の一税 (tithe) を英国々教会に収めねばならなくなったのであった。

理想主義に燃えた人たちが Britain の貴族支配の手先である国教会の牧師館を建てるために Ireland に渡って行ったということに、悲痛な皮肉が感じられる。そしてそういう牧師館はいつでもどこでも高い場所に立っていて、辺りを睥睨していたに違いない。だがどうだ、今や特に Northern Ireland では国全体が崩れかけているではないか。廃墟となって人も住まず、雨に打たれている牧師館の姿がよくそのことを表わしている。理想主義的な文化は真にそこに根づくことなく、荒涼とした風景に立ち戻っているのだ。

Georgian architects, ironic

Deists, crossed over from the mainland

To build a culture brick by brick,

And graft their reason to a state

The rain is washing out of shape.

ジョージ朝時代の建築家たちは皮肉にも

理神論者で 煉瓦を一つ一つ積んで一つの文化を築き

彼らの理性を一つの国に継ぎ木しようと海を渡って行ったのだったが

雨がその国を洗って形を無くしてしまいそう

雨の多いことで有名な Ireland だが、その雨が Ireland の形を崩しつつある。あの「狂気の天候」は今なお Ireland の空から去らず、Ireland は「理性」から程遠く、'unreasonable' な状態

におかれている。人々が人間の理性に従って、自然に素朴に、そしてその意味で本当に文化的に生きて行くことは今の Ireland には望むことは出来ないのか。そして下層の人々はいつまでも貧窮に苦しみ、土地も住居も追われて生きて行かねばならないのか。

古い牧師館に降り注ぐ雨が現実にもその廃墟の館を崩しそうに見える。そしてその風景がいかに Ireland の歴史と現状を一枚の絵のように物語っている。

‘Atlantic Changelings’ (「大西洋の取り換えっ子たち」) の詩は、一と夏の避暑の賑わいが済んで再び元に戻った Ireland の風景から始まる。はなやいだ中産階級の金持ちたちの避暑客の姿も儚く消えて、今は打ち寄せる波と雑草の生えた海岸の砂丘と、緑の海の水面に魚を漁る海鳥と、そしてもう都会に帰って行ってしまった人々の足跡が入江の浜辺に印されているばかりだ。元の荒涼とした風景に戻ったその海岸が、入り込んだ植民者たちによって一時の賑わいを見せながら、すぐに元の荒涼とした場所に戻って行く Ireland の雛形のようにさえ見える。

The breakers, the marram dunes,
A sea snipe beating over green water,
Footprints of passing visitors
On a curved strand ...
砕け波とコヌカグサの生えた砂丘と
緑の水面を打ち漁るイソシギと
入江の浜辺に印された
束の間の避暑客の足跡

Paulin は浜に残された人々の足跡を探偵のように身を屈めて辿って行きながら、つい先頃までの海岸の情景を想像する。その詩人の姿がまるでテレビの刑事コロンボを思い起こさせて一寸ユーモラスである。そこには多分地元民の子供だろうか、一人ぼっちで砂浜に落とし穴を掘った跡がある。海岸を夕方犬を連れて散歩した男の足跡もある。恐らく犬の足跡も付いているのかもしれない。そしてその男と教授夫人とが波打際で、上品な、都会の言葉を交わしながら立ち話をしたに違いない。

... I trace them now
Like a hunched detective scowling
In a dead resort, and learn the gossip
Of a social summer—see this walled pit
Scooped by that peculiar child
No one invited to their sandy picnic...
See where Long walked his dog last evening

And where the professor's wife met him
 By the tideline. They exchanged polite words
 On its drift of dry shells, though a sea potato
 In the likeness of a shaved pudendum
 Splintered their good manners.

……ぼくは背中を丸めた探偵のように顔を顰めて
 もう終わった避暑地の中で
 その足跡を辿り 社交の夏の
 噂話を知る——ごらんこの落とし穴は
 砂浜の行楽に誰にも連れて来て貰えなかった
 あの変った子が掘ったものだ
 ごらんあそこまでロングが昨晚犬の散歩に出かけたのだよ
 そしてあそこの波打際で教授夫人があつた男に出会つたのだ
 二人は死んだ貝殻の溜まりの所で
 上品な言葉を交わしたが 毛を剃った陰部に似たホヤを見て
 二人のお上品な物腰も木っ端微塵に碎けちまつた

Paulin の目の前にこれら都会の人たちの姿が「透明な影」となって現われる。「透明な影」とはどういうことだろうか。都会で現実生活する時と違って一時的に実体を自ら捨て、その意味で現実から解放された人々という意味だろうか。とにかく彼ら都会の中産階級の人々は今や都会での現実の身分や職業から離れて、自由な生活を楽しんでいる人たちである。都会では教授夫人が男と立話をする事など考えられない筈ではないか。それ程ここでは彼らは自由に振舞うのである。

Far from their different societies
 The scuffed patterns of these prints
 Show everyone changed into transparent
 Shadows, meeting on this shore,
 これらの足跡のへこんだ模様を見ると
 それぞれ違った階層から遠く離れて
 誰も彼もが透明な影に変わって
 この海岸で出会うのだ

Paulin が影たちに近づいて行くと、彼らは Paulin に向かって顔を上げる。その彼らの表情は何か御用？ という工合に見える。恥じらいながらも、しかし、自信に満ちているのだ。そして彼らは Paulin に向かって、こちらに来ませんか、仲間に加わりませんかと誘うのである。

Their inquisitive uplifted faces
 Challenge and beckon with a shy
 Confidence, their soothed voices
 Come floating from the class
 I could belong to (like them I have left
 The city to consume a wild landscape).
 We will pack soon and the sly locals
 Will repossess this expensive view.
 In the windy now I hug my righteousness
 Like a thermos flask. I cry out
 For a great change in nature.

彼らが訝るように上げた顔が
 恥じらいのうちに自信を浮かべて問いかけ 誘いかけるが
 彼らの声も和らげられて
 ぼくもその気になればその一員になれる階級から
 それは漂って来るのだった（ぼくだって彼らと同じように
 都会を離れて自然の風景を消費するためにやって来たのなもの）
 ぼくらが間もなく荷造りをして帰って行けば
 抜け目のない地元民はこの金のかかる眺めを取り戻すのだ
 吹きさらしの「今」の中にぼくはぼくの正しさを
 魔法壺のように抱きしめる ぼくは
 世の中が大きく変わって欲しいと 大声を上げて訴える

Paulin は自然の風景を「消費する」ために海岸に出かけて来る中産階級に嫌悪を感じている。この嫌悪の感情は明らかに Northern Ireland の Catholic の貧しい人々の感じであるに違いない。勿論彼は「抜け目のない地元民」にも批判の目を向けている。素朴であるべき地元民さえも金のために都会人によって墮落させられているのである。彼らは一時的にせよ都会人に自分たちの風景を「売って」いるのである。だがそれも彼らの貧しさのためなのである。誰にも海岸の行楽に連れて来て貰えなくて、一人ぼっちで砂浜に落とし穴を作った子供は多分、そういう地元民の子供の一人だろう。地元民たちは海岸がすぐそばにあるのに、自分たちの子供をそこに遊びに連れて出る余裕はないのだ。それに引き換え、都会からの人たちは何日もそこに滞在していて、お互いに顔見知りになり、自由に言葉を交わすのだ。

だが Paulin は自分もその中産階級の一人であることを自覚している。「その気になれば」自分も中産階級の一人になれることを彼は承知しているのであり、自分が中産階級の人間の一人として彼らに加わることを拒絶しながらも、間もなく彼ら中産階級の一人として彼らと一緒に都会に帰

り、そこでの生活に戻ることを考えながら呟いている。その呟きの中で Paulin 自身、思わず「ぼくらが」という言葉を口にしてしているのである。

Paulin は自分自身の中にある中産階級根性に後めたさを覚えつつ、自分だけは中産階級の「罪悪性」には染まらないぞという、青臭いまでの決意を固めているのだ。そのことは自分の「正しさ」(righteousness)を抱きしめるという彼自身の表現にもよく表われていて Paulin の中に Puritan の血が流れていることを感じさせられるのである。避暑のために海岸に遊びに行くことがそれ程「罪悪」なのかという反問をぶっつける人があるかもしれないが、地元の貧しい人々の目から見れば、金をかけて何日間も遊びに来る人間は「悪」に見えても仕方がないのではないだろうか。これは中流意識が国民の大半以上、80%にも浸透した今日の日本の中にいる人間から見れば分かりにくいことかもしれない。しかし、Northern Ireland では貧富の差が余りにも大きく、しかもその差が誰の目にも分かる形で露骨に出ているのだ。都会の金持ちに対する貧しい人たちの嫉みや怨みのようなものは相当に深いものであると思う。Paulin はこれらの現実に対してやり切れないものを感じ、間違った世の中の変革を切実に訴えるのだ。

「取り換えっ子たち」(Changelings)という、この詩の表題の表現にも、都会の人々に対する手酷しさが感じられる。たとえ一時的にせよ、避暑地をわが物顔に「占拠」して暮らす都会の金持ちたちは、まさに、醜い取り換えっ子に他ならない。美しい子供が天使にさらわれて、その後醜い子供が代わりにおいて行かれるのだという。その醜い子供が取り換えっ子である。

‘The Strange Museum’(「おかしい美術館」)も Paulin の中産階級の人間としての罪の意識が語られている詩である。詩はこの詩人が妻に向かって、先頃までの自分の生活について話して聞かせているという形を取っている。この前まで彼は England の中の、どこか郊外の町にいたのだ。tennis suburb とあるが、広い郊外の土地を開発し、沢山のテニスコートを作った場所があって、その周辺に出来た住宅団地のような地域のことをいうのだと思われる。Paulin はその町で妻の帰りを待っていたのだ。彼の妻は Belfast で、多分市街戦か terrorism の飛ばっちりを受けたのだろう、事故に遇って、まだ Ireland の病院で入院中だったのである。しかし彼女も間もなく England の、今詩人がいる家に戻って来ることになっていたのであった。Paulin は England で妻の帰りを待つ喜びを持ったことを思い出しながら、更にそれ以前、妻の入院の直後、彼一人で過ごした Ireland の生活のことを思い出して、妻に語っているのである。妻が事故に遇った後、彼は一人で大きな Ireland の邸を借りて、そこで暫く独り暮らしを続けたのであった。

Paulin が借りたその大きな邸は、かつて大金持ちの邸だったのだ。それは多分、Scotland から移住して来て、Ireland で成功した男が建てた物らしい。彼ら大金持ちたちは広い地所の中に Scotland のお城のような体裁で大きな邸を建てたのである。今ではそういう所は人に貸され、周りの地所は公園のようにになっているが、Ireland の「植民」化の名残りなのである。Paulin が独り暮らしをした家もそのような邸に違いない。Paulin はひっそりした広大な邸の中にただ一人いたのである。

First I woke in an upstairs drawing-room
 The curtains had been pulled back, but the house
 was empty. It was furnished and oddly
 quiet. A patriarch's monument.
 I could see others like it in a kind of park.
 Someone had built them long before in a crazed
 Scottish-baronial style, foolish with turrets.
 Snow had fallen during the night, so I woke
 to a white silence. You had gone away.

初めの頃ぼくは二階の客間で目を覚ました
 カーテンは開けられていたが邸は
 空っぽだった 家具は揃っているが奇妙に
 静かだった 族長の記念碑だ
 公園のような所に行くといつもこんな物を見かけることが出来た
 誰かがずっと昔 馬鹿気た小塔などをあしらって
 スコットランドの城館風に建てた物だ
 雪が夜中降っていた それでぼくが目覚めた時は
 白い静寂があるばかりだった 君もそこにはいないのだった

Paulin は自分がそんな、歴史的な一種の「影」を曳いている大邸宅の中にいることに後めたさを覚えたのだった。彼は自分がどういういきさつでこの大きな邸に住むようになったかについては何も語ってはいないが、とにかく彼は今自分がそこに住んでいることに、落ち着かない気持ちでいるのである。自分は決してこの大きな邸の所有者ではない、一時的に借りているに過ぎない、自分は本来このような所にいることを潔しとはしていないのだなどと自分を正当化しようとしている。だがその一方で Paulin は自分の妻が事故に遇ったことは一種の報復を受けたのではないかという気持ちに把われていることも明らかだ。自分の身の上にだってこれからどういうことが起こるか分からない。Paulin は恐らく、自分が Scotland から渡って来た植民者の子孫であることに負い目を感じている。今、Belfast の街を破壊し、Northern Ireland 全土を騒乱の真っ只中においているのは、長い年月にわたって傷めつけられた Ireland の民衆の精神が歴史の中に現われて、復讐の亡霊という形を取ったのだ。そうだとすれば、傷めつけた側の子孫である自分だって、その復讐の亡霊の呪いの手を免れることは出事ないのではあるまいか。

Was this the estate of some dead, linen
 millionaire? And was I some servile spirit
 who knew his place in the big house and was locked

in a fierce doctrine of justification?

Somewhere among the firs and beeches, there was
a god of curses who wished us both dead.

His finger was on the trigger. He was insane.

The vindictive shadow, I thought, he scatters
bodies everywhere and has broken the city.

そこは誰か今は亡い亜麻糸業者の百万長者の
地所だった所か？　そしてこのぼくは大きな邸の中にいて
自分の立場を心得ていて
自己正当化の信条に必死に縋み付いている卑屈な人間だったのか？
縦の木や横の木の林の中のどこかに
ぼくら夫婦の死を願う呪いの神がいたのだ
そいつの手が銃の引き金にかかっていた　奴は気が狂っていたのだ
復讐の亡霊だ　とぼくは思った
そいつが今も到る所に死体を撒き散らし　都市を壊しているのだ

だが Paulin は大きな邸の中にいることに後めたい思いを感じながらも、もう一方で、その邸の中の調度品の持つ形の美しさには強く惹かれている。それは恐らく18世紀後半に力を振った、柔かく、穏やかな、美しい弓形の曲線の美を持った装飾美術の持つ美である。その品々はバロック風 (baroque) の過渡に溢れ出るようなものも、またロココ風 (rococo) の派手な技巧も持たない、アダム様式の優雅な建築や家具の持つ美しさを持っているに違いないのである。Paulin はそういう物の持つ美しい形が精神の自由を表わしていると思う。迫らなくて優雅に整った美を感じている。彼にとっては、つまり、その大きな邸の中の、自分が寝起きした部屋が、「おかしい美術館」に見えて満更でもないのだ。そして、彼は恐らく、子供の頃過ごした、大きな祖父の家を思い出している。

I blamed him then, for I too had been touched;
my notion of freedom was like the curved chairs
in that room. A type of formal elegance.

Had you been there we would have made love
in that strange museum, but it would still
have oppressed us with its fixed anger.

I knew then, in that chill morning, that this
was the house I had lived in once, that I was through
with the polite dust of bibles, the righteous pulpits.

だからぼくはそいつを非難した　だってぼくも傷めつけられた側だったからね

ぼくの自由の思いはあの部屋の
 背凭れが弓形の椅子のようだった 優雅な形式美っていう奴だ
 君があそこにいてくれたら あのおかしな美術館の中において
 ぼくらは愛し合ったことだろう でもその代わりあの部屋は
 その揺がぬ怒りで今もぼくらを悩まし続けたことだろう
 だがぼくはあの時 あのと冷え冷えした朝の中で知ったのだ ぼくも昔
 そんな家で暮らしたことがあるということを だがぼくはもう
 優雅な埃を載せた聖典や正義の説教壇とは手を切った人間だということを

Paulin は Ireland の怒りから逃がれようと思ったのだ。彼は元々 England の北部に生まれたのだ（彼は現に Nottingham にいる）。彼は自分にとって England の神々の方が Ireland の神々よりずっと穏やかであることを感じながら、そこに帰りたいたいと願う。だがそう願いながらも、また一方では、England の神々の穏やかさが多少とも生ぬるさを秘めていることも意識するのである。Ireland への Paulin の執着は中々消えることはないように思われる。

So, later, I woke in a tennis suburb.
 History could happen elsewhere, I was free now
 in a neat tame place whose gods were milder.
 A cold dawn, but a different season.
 There was the rickety fizz of starlings
 trying to sing, and a grey tenderness.
 I was happy then, knowing the days had changed
 and that you would come back here, to this room.
 You were the season, beyond winter, the first freshness.

こうして今度はテニスクラブ団地でぼくは目を覚ますことになった
 歴史なんざ他所で起こってくれりゃいい ぼくは小綺麗で退屈な土地に来て
 今こそ自由だった そこでは神々もずっと穏やかだった
 冷たい夜明けは同じだが季節は違った
 元気だが少々覚束ない声で
 椋鳥が何とか歌おうとし 灰色の優しさがあった
 ぼくはその時 日々が変わってしまったこと
 そして君がここに この部屋に帰って来ることを知って幸せだった
 君は冬の力の及ばない新しい季節 生まれ出たままの新鮮さだった

Paulin は Northern Ireland の現実に嫌気がさし、遂に自分の妻まで巻き込まれるに及んで衝

撃を受け、そこから逃げ出したいと思う。そんな時彼の心を大きな邸の調度品の持つ優美な姿が把握するが、それもまた Ireland の民衆の犠牲の上に出来た物であることを感じ、Ireland の怒りを感じて、それとも手を切る。彼は England の郊外の町に逃がれてその穏やかさの中に和らぎを見出す。だが、それも一時的な和らぎではないのだろうか。Paulin は歴史から自由でありたいと望んだのに違いないが、歴史から自由であるということは、決して歴史から逃げ出すことではない。真に歴史から自由であるということは、詩人にとっては、詩人自身の精神の自由を守ることである。そして詩人はその自由な精神で、表面上賑やかで人目を惹く出来事や、歴史の中で華やかに活躍する人物の行動の蔭に隠れた状況や人の姿に触れようとするのである。彼は歴史という舞台から目を転じて、むしろその舞台の袖の部分に目をやるのである。その袖の部分の、見た所何でもないような、平凡な事柄の中に、彼はこの世の真実のドラマを見て取ろうとするのである。

‘The Impossible Pictures’ (「考えられない場面」) の中では、Paulin の脳裡に一つの歴史の舞台の袖で演じられるドラマがまるでニュース映画のように繰り展げられる。

In this parable of vengeance

There is a grey newsreel

Being shown inside my head.

この復讐の寓話の中では

一つの灰色のニュース映画が

ぼくの頭の中に写し出される。

Vladimir Iliich Uliianov, 筆名 Nikolai Lenin は男兄弟2人であり、兄は Aleksandr Uliianov といった。1886年4月、Lenin が16歳の時、Romanov 王朝の最後から2番目のツァー (Tsar) である Aleksandr III の暗殺を企てたが、翌1887年3月に計画がばれて、同年5月20日に他の4名の同志と共に処刑されたのであった。Paulin はこの Lenin の兄が処刑された時の情景を簡潔な、しかし含みの多い言葉で語っているが、それはまるで一昔前の白黒の無声映画でも見ているような感じにこちらを引き込んで行く。

Paulin はこの詩の中で、19世紀後半に起こったこの事件こそ20世紀初頭に起こったロシア革命の遠因であったことを、つまり、ロシア革命は兄の死に対する Lenin の復讐であったことを語ろうとしているのである。

What happens is that Lenin's brother

(Aleksandr Ulyanov)

Is being led to execution.

He carries a small look

Wrapped in a piece of cloth.

Is it the Bible or a text

His brother will be forced to write?

He twists it in his hands.

I think he is frightened.

I am wrong, because suddenly

He strikes an officer on the face——

His gestures now are a jerking

Clockwork anachronism.

He is goosestepped to the scaffold.

その情景というのはこうだ レーニンの兄

(アレクサンドル・ウリヤノフ) が

死刑執行に引き立てられて行く

彼は布に包んだ小さな本を

手に持っている

それは聖書かそれとも彼の弟が

やがて書かねばならぬ本の原本なのだろうか？

彼はそれを両手でくるくる回している

ぼくは彼が怯えているのだと思う

だがぼくの勘違いだった 何故なら突然

彼が一人の士官の顔を殴るのだ——

ほら彼の動きは一昔前の

ぜんまい仕掛けの人形みたい だが再び

彼は絞首台に向かって歩調を取って歩かされて行く

Lenin の兄が刑場で一人の士官の顔を殴るというようなことが本当に起こったのであろうか。真偽の程は定かでない。けれどもそういう挿話が伝えられているのかもしれない。そして Paulin はその挿話に対して非常な関心を寄せているのである。恐らく Paulin に言わせれば、そういう「考えられぬ場面」の中にこそ、普通歴史の中では語られない、しかし、本当に人間の真実を伝えるも

のがあることを信じたいのである。歴史の中からそういう真実を救い出すことが詩人の務めではないのだろうか。普通では「考えられぬ」場面が確かに実人生の中では起こることがある筈である。これから死んで行こうとする人間に対して何か無礼なことを言ったかしたかした一人の将校に対して、Leninの兄が心から怒りをこめてその将校を殴ったということが本当に起こったとしても、それは不思議なことではあるまい。周りの人間に押さえられようとしたか、手錠をかけられるかしていたためにその動作はぜんまい仕掛けのおもちゃのそれのように見えたのか。それだけにその動作は真に迫って見える。

Leninの兄が手に持っている本は何だったのだろうか。Leninはその兄の処刑後、18歳になってから、チェルヌィシェフスキー (Nikolai Gavrilovich Chernyshevskii) の問題小説『何をなすべきか』を読んだということである。そしてこのチェルヌィシェフスキーの小説は実はLeninの兄の愛読書であったという。更にLeninは後にこの小説と同じ題名の論文を書いている。Paulinの頭の中に写し出されている情景の中でLeninの兄が手に持っている物はこの小説ではないか。PaulinがLeninの革命運動の中にその兄の死に対する復讐の情念を見たのもそれ程突飛なことではないのだ。

この詩の途中から、凍てつくロシアの刑場の場面の上に、これまた映画のモンタージュのように、戦争色を漂わせる Northern Ireland の海岸の風景が重なり合わせり、場面は後者の風景に変わるのである。

The frozen yard of the prison

Is like this dawn of rain showers
And heavy lorries, a gull mewling
In its dream of the Atlantic.

Ah, I say, this is Ireland
And my own place, myself.
I see a Georgian rectory

Square in the salt winds
Above a broken coast,
And the sea-birds scattering

Their chill cries: I know
That every revenge is nature,
Always on time, like the waves.

この凍りついた監獄の庭は

驟雨と大型トラックの
今朝の夜明けのようだ
大西洋の夢を見ながら一羽の鷗が鳴く

ああそうだ　ここはアイルランドだ
ぼくの家郷だ　ぼく自身だ
ジョージ朝風の牧師館が

塩辛い風に吹かれて真向かいに
でこぼこの海岸を見下ろして立っていて
海鳥たちが冷たい叫びを

撒き散らしているのが見える　ぼくには分かる
すべて復讐は人間の本性であって
いつも波のように時間通りに寄せて来ることが

‘Going in the Rain’ と同じような Northern Ireland の風景が再びここに語られている。凍りついた19世紀の暗い監獄の庭の風景がそのまま今日の Ireland の海岸の夜明けの風景に引き継がれていて、そこに無情の雨と軍用の大型トラックの姿が写し出され、それが18世紀に建てられて今は多分廃墟となっているジョージ朝風の牧師館の姿に繋がって行く。今 Paulin は自分が愛する Ireland の荒廃を自分自身の痛みとして受け止めている。Northern Ireland の植民者の子孫であり、Anglo-Irish の中産階級の子として England の一流大学に学んだということに彼は罪の意識を感じているに違いない。つまり、彼自身が復讐を受けている Northern Ireland なのだ。

復讐という人間の原始的な情念が人間の歴史の中に姿を現わすという Paulin の図式には大変問題がある。復讐ということはどう考えても人間臭い、この世の生に執していることであって、そこには何か上昇して行くものはない。新約のローマ人への手紙第12章19節の「復讐するはわれにあり、報復はわれに委せよ」という主の言葉は明らかに復讐が人間の営みであることを禁じている。キリスト教はむしろ復讐よりも宥しを教え、復讐は終末の日まで神に委せられるべきことを説く。しかし主の言葉も復讐が古くから人間の本性の中に巣喰う原始的な情念であることを認めているのである。それは人間の業のようなものかもしれない。Paulin がこの復讐ということを持ち出して、それを墮落した同胞である Northern Ireland の Protestant を弾劾する筈とした気持ちは分かる。だが復讐が神のわざではなくて、人間の復讐である限り、そこには救いはないのだ。

その意味で、たとえ Lenin の革命といえども、絶対的な立場からはそれを認めてはならないの

ではないか。Paulin もこのことは恐らく承知していると思う。多くの無名の人々が死ぬ。敵も味方も、すべて一様に尊い生命が消えて行く。その意味では人間の歴史は、詩人の Geoffrey Hill が描いているように、無数の人間の殉教の歴史であると言えるかもしれない。だが何のための殉教なのか？ 神への信仰を証しするためでもなく、多くの人々を救うためでもなく、ごみのように捨てられて行くことが、殉教と言えるだろうか。それはもうただ虚しい死でしかないのだ。

Paulin は Haffenden との対談の中で詩人としての自分の態度について語りながら、そこで「歴史に穴を開ける」ということを述べている。

Although my ambition is to be responsible in a way, to give a sense of history and society, what I really want to do is to punch holes in history—tunnel through it—in order to get out into a kind of freedom which is contemplation and vision, ぼくの野心はある意味で責任を持つこと、つまり、歴史や社会についてどう考えているかを示すことにあるのですが、ぼくが本当にやりたいことは歴史に穴を開ける——歴史にトンネルを掘ることなのです。そのことによってぼくは冥想し、幻想するという一種の自由の中に入っていくことが出来るのです。

Paulin が「歴史に穴を開ける」と言う時、それは彼が詩人として見えないものを見るということを行っているのであり、それは想像力の自由ということを主張していることに他ならない。だが Paulin はこの時、同時にそのことが招く危険をも感じている。そのことを彼は Haffenden との対談で、前述の部分に続けて述べている。

By taking a historical event and translating it into imaginative terms or drawing imaginative parallels with it, you're suddenly transforming it perhaps into the world of myth—certainly into the realm of what is fictive. And by doing that you are actually punching a hole in the historical process and opening up an imaginative view of it. On the other hand, when you start mythologizing political events something very dangerous happens—you forget about human suffering involved and see the events simply in terms of what's glorious and heroic and mythic.

歴史的な出来事を取り上げてそれを想像力の言葉に置き換えるとか、その出来事に似た物を想像力で構成するとかすることによって、いきなりその出来事を多分神話の世界に変えてしまいます。少くとも虚構の世界に変えることは確かです。そしてそうすることによって成る程歴史の推移の中に穴を開け、想像力による展望を開くことが出来ます。しかし同時に、政治的な出来事を神話化する段になると大変危険なことが起こります。つまり、それに巻き込まれた人間の苦悩を忘れて、出来事をただ、きらきら輝く、英雄的で、神話的なものの観点だけから眺めることになってしまいます。

Paulin はそのままでは無意味な出来事の中から人々が歴史を「構成」し、反逆の指導者を英雄扱いするようなことの持つ危険性を自覚していたのだ。それは、出来事の固定化 (fixation) とも呼ぶべきものである。彼は 'What is Fixed to Happen' (「固定される出来事」) という詩の中で、歴史がとにかく面白がって眺められ、また面白く語られてしまうことに警戒を促している。

... Pulped bodies happen

In a charred street, and what we know
Is secular: imprisoned shadows
And black plastic shrouds. A public death.

In a scorched space, a broken nowhere,
A homeless grief beyond all grievance
Must suffer nature and be free.

It knows true pity is a rarer love
That asks for neither action nor revenge.
It wills nothing and serves nothing.
……どろどろになった死体が

黒焦げの街に現われる ぼくらが経験するのは
皆非宗教的なものばかりだ 閉じ込められた亡霊と
黒いプラスチックの屍衣 国全体が死んでいる

焦土の中で でこぼこの無名の場所で
どんな嘆きも及ばぬ寄る辺ない悲しみが
自然の作用を受けて解放されねばならぬ

真実の憐れみはこの世ならぬ愛であり
行為も復讐も求めないことをそれは知っている
愛は何事も命じないし何者にも仕えない

固定される出来事、神話化される出来事としての歴史は自分がその実は虚しく、汚れていて、悲惨な物であることを知っている (「それは知っている」)。それは自分が行為と復讐の繰り返しであることを知っている。それは、自分の中で、無数の人々が無名の場所で孤独に死んで行くことを知

っている。それは自分が力を貸した Lenin や Trotskii が革命の成功を果たした蔭に、敵も味方も実に無数の人々の苦しみや死があったことを知っているのだ。

Paulin はここで憐れみということを口にしてしている。憐れみとは神の正義であり神の愛である。神の正義は行為や復讐を拒否する。当然神の正義は、自らは神の正義のごとく振舞いながらその実は圧制と報復を繰り返す Ulster Protestant の国家を拒否する。勿論憐れみだけでは現実の Ireland 問題は何も解決しないことは Paulin もとっくに承知している筈だ。だが、彼が 'From' のような詩の中で、荒涼とした Northern Ireland の海岸の景色を思い浮かべる時、そこに射している夕暮の淡い光の中に、彼がこの世を包む神の慈愛の光を感じているのではないかという気がするのである。いや彼の抒情詩の殆どすべての作品の中に、そういう、淡いけれども、優しく包んでくれる光のようなものを感じることが出来るのである。

そしてこのことは、Paulin が惹かれている、すべてに調和がとれていて、つまり、穏やかで、きちんとしていて、そして淡い色彩で彩られているという、アダム様式の新古典主義的な室内装飾の特色をここでもう一度思い起こさせる。そしてこのようなものこそ、Ton Paulin という一人の詩人が心がけている人生態度を示すものであり、また同時に、彼が目ざす詩の特色を表わしていると言えると思うのである。

精神や想像力の自由と自然さと優雅な美しさこそ、恐怖と狂気の世界の中に生きた Raulin が常に求めた物に他ならなかった。精神も想像力も共に歴史から自由でなければならないのだ。

Tom Paulin—History and Imagination

Ken-ichi Haya

Tom Paulin was born in Leeds, the north of England, in 1949, but moved at an early age to Belfast and was brought up there. His parents were Scottish Presbyterians who settled in Belfast, and his mother was perhaps born there. He is deeply connected with Northern Ireland, though he was educated at the universities of Hull and Oxford and is now a lecturer in English at the University of Nottingham. He has published three books of poetry and a critical study of Thomas Hardy's poetry.

The Trouble in Ulster is his major theme; he observes and angrily describes, the world he sees, the world of terror, revenge and oppression in Ulster. Meanwhile, he depicts calm and peaceful scenes in the country-side landscape of Northern Ireland as an alternative to terror.

Tom Paulin is a poet who is always aware of history and society. But he turns his eyes away from the history which informs us merely of sensational events and tells us exciting stories of heroic persons. He knows that what history in reality is tragic, secular, bloody, and vain. It means numberless deaths of many anonymous human beings. It can be said to be a series of martyrdoms, as the poet Geoffrey Hill suggests in his work. Paulin cares more for the realities of everyday life.

We can see that Tom Paulin cherishes most the freedom, naturalness, and elegance of the spirit and imagination. These are qualities which have nothing to do with effects imposed upon the spirits and imagination from the frantic outside world, both of which should be free from history.